

# 内田寛一の近世歴史地理学

—その形成過程と展開—

川 合 一 郎

- I. はじめに
- II. 京都帝国大学入学と小川琢治
  - (1) 小川琢治との出会い
  - (2) 地理学者としての胎動期
- III. 歴史地理学観と石橋五郎
  - (1) 歴史地理学観の特徴
  - (2) 石橋五郎の影響
- IV. 近世農村研究とその展開
  - (1) 近世農村研究の開始と背景
  - (2) 熱海初島の研究
  - (3) 武蔵野西窪村の研究
- V. おわりに

## I. はじめに

内田寛一(図1)は近世歴史地理学の創始者である<sup>1)</sup>。明治末期の京都帝国大学文科大学(現、京都大学文学部)で地理学者の小川琢治、石橋五郎らに学び、歴史的考察を重視する学風を身につけた<sup>2)</sup>。その歴史地理学は、あくまで現在を明らかにするために過去の地理を解明するという理論に基づいており、常に「現在」を意識するという独自の立場を堅持した<sup>3)</sup>。また実際の研究に際しては、検地帳や宗門人別改帳などの近世地方文書を精力的に収集し、緻密に考証するという手法を駆使した。内田の研究分野は歴史地理学だけにとどまるものではなく、経済地理学や政治地理学、郷土地理、地理教育など広範



図1 内田寛一の肖像

出典) 内田寛一先生還暦祝賀会編  
『内田寛一先生還暦記念地理学論文集 上巻』  
帝国書院, 1952。

にわたる<sup>4)</sup>が、博士論文が歴史地理学的領域に属する<sup>5)</sup>ことから窺えるように、歴史地理学は内田が最も情熱を注いだテーマの一つであった<sup>6)</sup>。

これまで内田に関しては、勤務先であった東京文科大学(のちの東京教育大学。現、筑波大学)の門下生・菊地利夫がその歴史地

キーワード：内田寛一、近世歴史地理学、京都帝国大学、近世農村、近世文書

理学史上の位置づけについて論じたのが、事実上唯一の専論という状況であった<sup>7)</sup>。菊地は内田の歴史地理学の特徴を「現在のための過去の地理」と初めて指摘したが、これは卓見であり、この見解はその後の地理学史においても踏襲されることとなる<sup>8)</sup>。加えて菊地は、近世歴史地理学の研究に着手するに至った契機やその学問の特徴についても詳細に論じている。内田の生前に書かれた菊地のこの論考は内田自身へのヒアリングを踏まえた可能性があり、今となっては貴重な記録である。内田に関する論点はこの論考でほぼ出尽くした感があるが、一方で論じ残した点や疑問点もある。例えば、なぜ内田が「現在のための過去の地理」の研究を目指したのか、またその理論的立場が具体的にどのように実践されていたのかなど、十分明らかにされているとは言い難い。また、菊地は小川からの学問的影響を指摘するが、両者の方法論的な共通点は必ずしも多いとはいえず、この点についても検討を要すると思われる。

ところで黒崎千晴は現代の歴史地理学の系譜について、京都帝国大学教授小牧実繁に始まる京都学派、内田寛一に始まる大塚学派の2つに大別されるとしている<sup>9)</sup>。京都学派については研究蓄積が進みつつあるが<sup>10)</sup>、一方の大塚学派の祖・内田寛一についても考察を深めることは、わが国の歴史地理学説史を解明する上で必要不可欠であると考えられる。

そこで本研究では、菊地の研究をベースにしつつ、内田の歴史地理学の特徴や形成過程、その展開について明らかにしていく。その際、菊地の研究では十分取り上げられなかった内田のライフヒストリーや個々の業績に着目することで、内田の実像に迫ることとしたい<sup>11)</sup>。

## II. 京都帝国大学入学と小川琢治

### (1) 小川琢治との出会い

内田は明治21(1888)年3月、佐賀県東松

浦郡呼子(現、唐津市)で士族の子として誕生した。内田家は唐津藩の要職にあったことから、幼少のころから漢籍や古文書に親しんでいたという<sup>12)</sup>。この家庭環境が内田の歴史地理学研究のルーツとなったかどうかは不明であるが、のちに近世文書を探索・分析するうえで心理的な抵抗感が少なかったのではないと思われる。長じて佐賀県立唐津中学校(現、県立唐津東高等学校)に入学したが、在学中に日露の日本海海戦の砲声を聞いて興奮したことが、のちに随筆集『山のこなた』に記されている<sup>13)</sup>。

明治39年に同校を卒業し、そのまま東京高等師範学校(のちの東京教育大学。現、筑波大学)予科甲組地理歴史部に入学した<sup>14)</sup>。地理歴史部を選んだのは「人間の活動の関係のある学問」に関心のあったことが理由であったという<sup>15)</sup>。当時の同校の地理学担当教授は、小川と並んで近代地理学の祖の一人とされる山崎直方であり、同時代の証言によればその授業は「画期的なもので(略)限りない地理学の興味を喚起」されるような内容であったという<sup>16)</sup>。内田に対して熱心に大学での地理学研究を勧めたのは、この山崎であった。山崎は「東京帝大でも地理学講座設置の噂はあるが、今は全く未定だから、その機を待たないで京都帝大へ入学して小川(小川琢治―筆者注)につけ」と激励し、京都帝大入学を促した<sup>17)</sup>。

このような山崎の勧奨もあり、内田は明治43年9月、京都帝大文科大学史学科に入学した<sup>18)</sup>。京都帝大にわが国初の地理学講座が誕生したのは、明治40年であり、史学科を構成する史学地理学第二講座がまさに地理学専攻であった。つぎに東京帝大に地理学講座が誕生するのが明治44年であったことから、内田が東京高等師範を卒業した当時、地理学を専攻できる唯一の大学が京都帝大であったこととなる<sup>19)</sup>。

小川琢治は同講座の初代教授であった。新

学期開始の際、内田は山崎の紹介状を持参して小川に面会すると、小川は東京高等師範での地理学の授業科目を確認したうえで「徒な重複は避けよう」として、「地理学概説」と特論の「支那地理」の講義を実施したという<sup>20)</sup>。なお、初代の助教授は石橋五郎であったが、内田が入学した当時は英独に留学中であったため、代わりに中目 覚が経済地理学などを講義した<sup>21)</sup>。その他、歴史地理学者の喜田貞吉や経済史家の内田銀蔵からも講義を受けた。菊地は「内田寛一教授にその歴史地理的概念の形成するに役立ったのは、喜田貞吉教授の歴史地理学よりも内田銀蔵教授の史学方法論や小川琢治教授の地理学的見解であった」<sup>22)</sup>と指摘している。内田銀蔵の影響については今後の検討に委ねたい<sup>23)</sup>が、やはり着目すべきは小川が存在であり、それが明瞭に窺えるのが、卒業論文である。

## (2) 地理学者としての胎動期

大正2(1913)年7月、内田は卒業論文「秦嶺の研究」を提出して卒業し<sup>24)</sup>、大学院に進学した。この卒論は残念ながら未発表であり、また原稿も残存していない<sup>25)</sup>ことから、その全体像を知ることは不可能である。菊地はこの卒論について「小川琢治教授からアジア地誌の講義を受け、同教授に私淑した若き日の内田寛一教授は卒業論文のテーマとして『秦嶺の研究』を選んだことは不思議はない」と指摘し、その上でこの論文には「後年の主張した歴史地理学的な意味で史的研究法が必要であることを力説されてあった」としている<sup>26)</sup>。指導教官の小川はもともと地質学や自然地理学に関心があったが、京都帝大に着任後は本格的に人文地理方面の研究に着手し、とくに中国歴史地理には強い関心を払っていた<sup>27)</sup>。後年ではあるが、中国歴史地理や中国地図史の研究を盛り込んだ『支那歴史地理学研究(初集・続集)』を昭和3(1928)年から翌4年にかけて刊行している。内田自身は以

下のように回顧している。

小川先生は、探検については特別の興味を有っていられたようである。(略)卒論に「秦嶺の研究」を課せられたのも探検の基礎として、南北支那の障壁として重要な役割を演じてきた秦嶺に指を染めよといわれたのである<sup>28)</sup>。

当時はドイツのリヒトホーフエンの『支那』など、世界の地理学者が中国奥地への関心を高めていた<sup>29)</sup>。秦嶺は中国平野部を大きく南北に分けてきた重要な地理的・歴史的意義を持つ山脈であり、内田は小川の指導のもと、この地域の自然や人文にわたる歴史地誌的な研究を試みたと思われる<sup>30)</sup>。ここに小川の強い影響を見出すことができる。

内田は大学院のテーマでも中国地域研究を選んだ。研究題目は「支那民俗に及ぼせる地理上の影響」とある<sup>31)</sup>。「民俗」とは意外であるが、のちに内田は「大学院の研究問題も『支那民族に及ぼせる自然の影響』であった」と述べており、おそらくは「民族」が正しいのであろう。中国における民族史に与えた自然の影響を探るテーマであり、自然地理学に通じる小川の影響らしく、歴史に与える自然的条件の影響を重視する研究テーマであった。結局、大学院在学はわずか1年であり、大正3年3月より地理学教室の助手に就任した<sup>32)</sup>ため、この研究をどの程度進めたのかは不明である。なお、この大学院在学中の特筆事項として、ドイツの地理学者アルフレッド・ハットナーらを上高地に案内し、梓川河畔で擦痕のある岩塊「ハットナー石」の発見に立ち会ったことがある。これを小川が氷河の漂石であると見なし、日本における低位置氷河論争の発端となったことはよく知られている<sup>33)</sup>。

さて、内田は助手就任後の大正4年、文部省の受託を受け、第一次世界大戦を契機に新

たに日本の委任統治領となった南洋諸島の調査に取り組んだが<sup>34)</sup>、これも小川の推薦ないし指示であろう。大正3年から5年にかけて南洋諸島に関する研究成果が複数見られるが、まさに小川の地球科学や探検への関心の影響下になされた成果であると考えられる<sup>35)</sup>。加えて内田は小川の考古学的研究の手伝いをしており、とくに大正4年6月、岡山県大島村(現、笠岡市)の津雲貝塚で完全な人骨を発掘している。内田は同年10月の京都帝大史学研究会において「岡山県大島村貝塚と其人骨」と題して発表している。内田は近時、貝塚研究が進展しているが、その貝塚を残した人々が「如何なる種族なりしかといふ問題」は未解決であると論じた上で、この津雲貝塚では周囲の地形や地層、包含物などを分析した結果、発掘した人骨は「貝塚生成の時代と(略)密接なる関係あるを断じ」ている。さらに進んで、この人骨がいかなる「人種」かについて遺物も参考に研究を進めたいとしている<sup>36)</sup>。

以上のように、この時期の内田は小川の影響が非常に濃厚であり、あたかも小川の分身のような印象を受ける。内田は大正5年7月に文部省の図書官(のち図書監修官)に転じたが、仮にそれがなければ、小川のように中国歴史地理や自然地理学の道、あるいは後輩の歴史地理学者小牧実繁と同様に先史地理学の道に進んでいた可能性もあり、興味深い。

ところで内田の文科大学在学中の大正元年12月、英独に留学していた石橋五郎が帰国した<sup>37)</sup>。すでに石橋は留学前より地人相関論的な見方をもち、かつ歴史的考察を重視する人文地理学研究を進めていた。内田が石橋の指導を受けるのは大学院と助手の約3年間である<sup>38)</sup>。この時期には石橋の影響は全く見られないが、大正末頃より突如として石橋の影響が表面化してくる。この点については次章で詳述する。

先ほど触れたように大正5年、内田は文部

省に転出し<sup>39)</sup>、さらに9年後の大正13年12月に母校の東京高等師範および浦和高等学校(現、埼玉大学)の教授として着任した<sup>40)</sup>。その翌14年5月、内田は自身の歴史地理学観に関する極めて重要な論考を発表する。それが「地理学研究上に於ける史的観察の分野」<sup>41)</sup>である。以下ではこの論考に加え、時代は下るが昭和27(1952)年の論考「歴史地理の重要性」<sup>42)</sup>もあわせて検討を加えることとしたい。というのも菊地が指摘<sup>43)</sup>するように、両論文における歴史地理学観は約30年一貫して変化していないからである<sup>44)</sup>。

### Ⅲ. 歴史地理学観と石橋五郎

#### (1) 歴史地理学観の特徴

「地理学研究上に於ける史的観察の分野」および「歴史地理の重要性」によれば、歴史地理学は常に2つの方面から理解される。まずは、現在の地表面の地理的意義を解明するためには歴史地理学的検討が必要だという点である。もう一つは、各時代における地人相関を解明する必要があるという点である<sup>45)</sup>。しかしこの2方面は最終的には「一に帰する」のであり、いずれも地理学の本来の目的である「現在を知る」<sup>46)</sup>ための行為である。

この現在を知るための歴史地理学について、内田は次のように述べている。

現今の地理事項は、これを一面から見れば、時の産物たらざるはないといひ得るであらう。(略)それ故に、現在の地理事項にあつては、現時の環境—自然的環境及び人文的環境共に一と対照して、十分に其の意義を明かにし得る部分があると共に、到底これを明かにすることの出来ない部分もあるべき筈である<sup>47)</sup>。

内田はこの「十分に其の意義を明かにし得る部分」を「現代的の部分」とし、通常的人文地理学の研究対象であると考えた。一方で

「到底これを明かにすることの出来ない部分」は「非現代的の部分」であり「過去の歴史の余命」であって、これを明らかにするには現在の地表面だけを観察しても不十分で、過去に遡って歴史地理学的検討を加えるほかはないと考えた。この非現代的部分は、「過去の或る時代にあつては、地理上意義の深い文化事実」があったはずである。したがって、その時代にまで遡って地理的意義を明らかにし、あわせてその後の変化や継続性を検討する必要があると考えた。

かくて地理学は「過去における地人相関の進化」、すなわち各時代における自然と人間との相互関係の研究に踏み込むこととなる<sup>48)</sup>。しかしこの方面の研究も、目的は現在の地域理解であって、単に過去のための過去の研究であることは許されない。なぜなら地理学とは、あくまで現在を対象とする学問だからである。したがって歴史地理学とは、「現在の地理事項に含まれている歴史性を地理学の対象としようとして生まれた」領域ということとなる。このように現在の地域理解のための過去の地理に取り組む研究手法は、「人文地理学の歴史的方法」と呼ばれる<sup>49)</sup>。

次に、現在の地理的事象を明らかにするために、どこまで時代を遡るかが重要となる。この後でも詳述するが、内田自身は近世までを研究対象とし、先史時代や古代、中世などにあまり言及することがなかった。菊地によれば、『『現在のための歴史地理学』』にとっては、各時代の重要性が現在の地理を説明するに貢献する程度いかんによって定まっている<sup>50)</sup>と指摘しており、これに従うならば、現在を説明する上で重要なのは近世であり、先史や古代、中世は不要であったという結論となる。

この点について内田は、「時代をいつまで遡ればよいかといったようなことは、事項によって自然に定まってくることであつて、一概に規定すべき性質のものではない」とした

うえで、次のように述べている。

先進諸国の学者の中には考古地理学を歴史地理学の中に入れるのは勿論、地質時代（略）のことも（略）歴史地理の一部門と考えている人もある。これを歴史時代のことについて見ても、例へば土地区画の問題などでは条里制にまで遡る必要がある<sup>51)</sup>。

このように内田は、テーマによっては先史時代、地質時代にまで、歴史時代についても古代・中世にまで遡るべきことを指摘している。内田が歴史地理学研究を進めるにあたり、条里制を含む古代・中世の地理をあまり取り上げなかったのは、現在を明らかにするために古代・中世が不要と考えていたわけではなく、むしろほかに事情があったものと推察される。この点については後述する。

## (2) 石橋五郎の影響

以上のような内田の歴史地理学論に影響を与えたのは、実は小川よりむしろ、もう一人の指導教官であった石橋であった。小川の歴史地理学もいわゆる「人文地理学の歴史的方法」との位置付けであり、共通点がないわけではない<sup>52)</sup>。しかし古い時代に遡って地理的事象の起源を論ずることの多かった小川<sup>53)</sup>に比べ、石橋のほうが方法論的連続性は濃厚であったといえる。

石橋の人文地理学の特徴は、一言でいえば歴史的考察に基づく地人相関論の展開であった<sup>54)</sup>。明治39年には論文「自然ト経済トノ関係」において、地理学を地と人との関係の科学と位置付けている。また明治41年には「武庫地方に於ける集落の変遷」と題する講演を実施し、兵庫県西宮付近における集落の変遷とその要因を歴史地理的にとらえたが、それはあくまで現在の地域理解のための歴史的考察であった<sup>55)</sup>。後年、石橋は自身の立場

を次のように述べている。

今日の所謂人文景観と称するものゝ人事事象はその大部分が過去人の所産である。之れその人文事象と地との関係を考ふるに当つてはこの人文事象を説明する歴史を閑却し能はざる所以である。時ありては歴史的説明が地人相関の解釈の大部分を占むるのである<sup>56)</sup>。

ここで石橋は、現在の地人相関の説明には歴史的考察が不可欠である点を強調しているが、この考え方はまさに内田の歴史地理学論と軌を一にするものである。内田は論考「地人相関の理法的研究に就いて」において、「時代的の差別性及び共通性を明かにすることによつて、(略)現在の地人相関上の本質及び形態は、いかなる起源によつて生成し、いかなる経過をたどつて发育し、以て今日に至つたかといふことが明かとなる」<sup>57)</sup>と述べている。内田にとって歴史地理学とは現在地域理解のための重要な研究法であり、かつ地人相関の視点を基礎に据えるものであった。この点で石橋の所説と見事に一致するのである。

かつて藤岡謙二郎は、京都帝大で学んだ歴史地理学には「狭義と広義の二つの歴史地理学」が見られたと述べている。「狭義の歴史地理学」が、のちに同大教授となった小牧実繁が提唱した過去の「時の断面」における景観復原を主とする立場であり、もう一つは石橋に始まる「広義の歴史地理学」、すなわち歴史地理学を地理学の一研究法とする立場であると<sup>58)</sup>。その上で藤岡は、「石橋のこのような現在地域理解のための変遷史的研究」が内田に継承されていることを指摘している<sup>59)</sup>。

このように内田は京都帝大助手の頃までは小川の強い影響下にあったが、東京高等師範などの教授を務めた大正末以降は、石橋の影

響が顕在化してくる。あらためて石橋と内田の理論・研究領域を見比べると、地人相関論や歴史的考察の重視をはじめ、経済地理学や政治地理学、人口研究、地理教育など、複数の共通する理論・領域があることに気づかされる<sup>60)</sup>。内田自身、恩師としての石橋に対する言及は小川に比べると圧倒的に少なく、交流もそれほど多くなかった可能性もあるが、学問的な影響は着実に受けており、それが大正末頃より発露したと見るべきであろう。ちなみに歴史地理学ではないが、昭和5年から8年にかけて経済地理・商業地理的な論文が相次ぐのは、こうした石橋の影響が顕在化したものとみることができよう<sup>61)</sup>。

#### IV. 近世農村研究とその展開

##### (1) 近世農村研究の開始と背景

内田が近世農村に初めて興味を抱いたのは、遅くとも大正7年頃であると考えられる。第一次世界大戦の終結以降、都市と農村の経済格差の問題や小作争議が進行し、農村問題が拡大する<sup>62)</sup>中で農村の振興が官民の間で取り上げられるようになり、文部省在職中であった内田もその関係の研究會に列席することがあった。内田はそこでの所感を、以下のように述べる。

席上で出る話には殆んど学的根拠がなく、随つて農村振興の基調とすべきものが見出されないのは遺憾であった。その基調を得たいという希望が、筆者の胸に湧き出し、そして農村の実態、せめては戸口だけについてでも知りたいという念にかり立てられたのであった<sup>63)</sup>。

農村振興の基本問題は農地の分配状態や戸口にあると位置づけた内田は、「それは江戸時代と比較考察することが肝要である筈である」との結論に至るのである。明治時代において総人口は増加したにもかかわらず農村戸

口・人口はそれほど増加していなかったが、その背景には明治以降も農地面積が拡大せず零細農家が依然として多かったため、農村の次男、三男や女性が都市に移住したことが要因にあるとした。内田にとって明治以降という「現代」の問題を探るには、その直前にあたる近世の状況を知ることが重要だと述べているのである<sup>64)</sup>。内田は次のように指摘する。

徳川時代以後、我が国の総人口と耕地総面積との間にはいかなる関係があるか。これは我が国の現在および将来の人口と耕地との関係を考へる上の基本問題として取り上げらるべきことである<sup>65)</sup>。

内田が近世農村に焦点を絞って歴史地理学的研究を試みたのは、昭和9年6月の論考「耕地の区画と戸口との関係」<sup>66)</sup>が初めてであった。この論文は関東地方における近世農村の耕地や戸口を検地帳などに基づいて考察したものであったが、ここでも内田は「かゝる研究は農村問題、地方自治問題等を考究する上の根本問題」<sup>67)</sup>として重要視されるべきであると指摘している。そしてこれ以降、内田は近世農村研究を本格的にスタートさせることとなる<sup>68)</sup>。

ここで確認しておきたいのは、徹底した史料考証主義という内田の研究スタイルである。すなわち内田の研究は、常に記録文書の存在を前提としている。例えば内田は先にあげた「耕地の区画と戸口との関係」において、古代の条里から現代にいたる地割の変容に取り組むと表明しつつ、「条里制の実施された古い時代から、織豊時代乃至は徳川時代までの長い年代の間においては、諸問題に関する確実精細な資料が少い」などとして、「一足飛びに織豊時代以後における検地帳」を取り上げると明言している<sup>69)</sup>。別の論文でも「かの大宝令において戸籍の制が布かれ

て、甚だ古い戸籍調査の歴史を有してゐる我が国であるが、当時の戸籍簿の残存するものは甚だ少ない」と述べ、一方で徳川時代の宗門調査は全国にわたり、その調査も厳密であったので史料として信頼に足ると述べ、近世からの調査結果をまとめている<sup>70)</sup>。このように内田にとって史料の有無や多寡が、遡る時代を決定していた可能性が高い。山崎は、近世歴史地理学は「文献歴史地理学」でもであると指摘し、近世だからこそ資料が豊富で、かつ割合多く保存されているが、古代・中世となると勢い実地調査に頼らざるを得ない、と述べている。逆に言えば、文献歴史地理学は近世村落の研究から始まったともいえ、近世歴史地理学と史料考証とは表裏一体の関係にあった<sup>71)</sup>。

さて、内田の研究は、まず現地で記録文書を探索することからスタートした。例えば昭和11年の「漁場の県界に及ぼしたる影響」では、岡山・香川両県間の瀬戸内海上にある大槌島の県界線について、その歴史的経緯を調査するため岡山県側の文献を探して数年徒勞に終わったが、香川県側に「享保年間境界裁決当時の記録」が残っていることを知り、「喜び勇んで、早速これを借覧」したとある。寛文5(1665)年以後、キリシタン探索のために幕領・藩領において年々作成され、結果的に人口・戸口調査の意義を有するに至った宗門人別改帳<sup>72)</sup>については、大正10年頃から収集を開始したという(図2)<sup>73)</sup>。保管する旧家をたずねて借覧したり、自ら購買したりして<sup>74)</sup>、収集した宗門人別改帳の類は関東・中部地方でおよそ120ヶ村分、五百数十冊に及んだ<sup>75)</sup>。何度も通って借覧に至ったこともあり<sup>76)</sup>、なかには内田にしか公開されなかった史料もあったという<sup>77)</sup>。

菊地によれば、村落に近世文書が豊かに残存していることに気が付いたのは、京都帝大の助手の頃、小川の指示で近世の正保図・元禄図などを集めた経験からだったという<sup>78)</sup>。



図2 内田作成の「宗門人別書上帳調査原簿」  
 (左：有石高 右：無石高) (著者撮影)  
 出典) 国士館大学文学部地理学教室所蔵「内田文庫」。  
 詳細は本文注25) 参照。

こうした経験からか、内田が近世の地方文書を研究資料としたのは、社会経済史学や一般の史学よりも早かった。経済史学者の本庄栄治郎は大正14年発行『近世農村問題史論』の序文において、徳川時代の農村問題を論ずるにあたり「其材料も一般的文献より之を採り、個々農家の記録等を入手する能はさりし」との理由もあり、「農家の実際に触れ得ざりし処もある」と謙虚に述べている<sup>79)</sup>が、社会経済史の分野ではおおむねこのような実態だったのであろう。内田門下の浅香によれば、内田は「資料の整理と解釈、論証、そして体系化については、細かい克明な指導」するとともに、「地理学者の弱点といわれる資料の吟味もやかましく、細部はもとより大局的な検討も強調」したという<sup>80)</sup>が、まさに内田は徹底した史料考証主義であった。

後述するように内田は昭和8年12月、東京文科大学地学科地理学専攻の助教授に就任した<sup>81)</sup>が、当時の史学科国史学専攻では、教授の松本彦次郎が古代・中世の文化史を、助教授の肥後和男が古代史を研究対象としていた<sup>82)</sup>。なかでも肥後は、次第に民俗学に傾斜し、文献史料に加えて非文字の民俗資料を重視する手法を採用するようになり、文献考証を軸とする伝統的な史学とは一線を画する、

独自の学風を形成しつつあった<sup>83)</sup>。当時の東京文科大学国史学専攻の傾向についてはさらなる検討が必要であるが<sup>84)</sup>、近世農村研究、とりわけ地方文書の収集とその解明は地理学専攻の内田が国史学専攻に一步も二歩も先んじていたのではないかと推察される<sup>85)</sup>。

以上、内田が近世を選択した理由、および研究手法である徹底した史料考証について検討を加えた。内田が近世を選んだのは、「現代」の問題を明らかにするためにはその直前の近世に遡る必要があったためである。しかしすでに見たように、「土地区画の問題などでは条里制にまで遡る必要がある」と指摘しながらも、史料の少なさから古代・中世にあまり意識を向けなかったところは、内田の研究スタイルとその限界を示している。内田が農村研究にあたって近世を選んだのは、一つは近世という時代的重要性を積極的に評価していたからであるが、もう一つは史料の有無や多寡という消極的・現実的理由もあったのではないかと推測される。

## (2) 熱海初島の研究

内田は昭和8年、東京文科大学の助教授に就任した。この翌9年、内田の歴史地理学の代表的な著作が刊行される。それが『初島の経済地理に関する研究』である<sup>86)</sup>。初島は静岡県熱海の東南海上約10kmに位置し、周囲約3km、総面積約0.35km<sup>2</sup>、高度30~40mの台地状の小さな孤島である。河川もないことから水田はなく、耕地はすべて畑となっている<sup>87)</sup>。集落は島の北岸に集中している。

内田が着目したのは、このような制約された自然環境の下で、従来伝えられてきた風説である。すなわち当時の戸数41戸は島の規約で定められているもので古来増減がないこと、しかも各戸の所有畑は昔から均分されていて共産社会・共産村を形成していること、の2点であった。この点が真実であるかどうか、さらにその事情はいかなるものかを知る



ためには、歴史地理学的考察が不可欠であるとして、文禄4(1595)年の検地帳をはじめ貞享2(1685)年の「初島村鏡」などの古文書、明治23年の土地台帳や地籍図を探索・利用している<sup>88)</sup>。内田は本書を「初島の経済地理に関する歴史地理学的研究」<sup>89)</sup>とも表現できると指摘しており、この研究は「過去における初島の自然と人文との関係を明かにする上に大切であるばかりでなく、現在の戸数の存在の意義を考へるにも(略)必ずや有力な資料となるであらう」<sup>90)</sup>と述べている。

本書の構成は表1のとおりで、文禄年間(1592-1596)から近代までの耕地と戸口との関係について論じている。初島の畑地は、内田によれば文禄4年から幕末、さらに明治23年の測量までの約350年の間、13町5反8畝3歩で一貫しており変動がなかったが、これは島の開発が文禄4年時点で飽和状態にあったことを示している。一方の戸数については、文禄4年の「検地帳」における28戸ないし30戸が、貞享2年作成の「初島村鏡」では天和3(1683)年時点の戸数は39戸となっ

ており、約100年間に11戸ないし9戸の大幅な増加を見ているのである。ここから、古来より戸数41戸と定められていたわけではないことが立証されたわけである。しかし天和3年以降は大きな変動はなく、天保年間(1830-1844)に41戸となつてからは昭和7年まで同じ戸数であった。これは、初島では耕地が拡大できない以上、戸数が増加すれば戸別の耕地面積が減少するのは当然であるから、天和3年以降においては戸数増を警戒・抑制してきた結果と考えた。これは人口増についても同様な事情であり、これが規約で戸数41戸と定められているという風説をうむことになった背景だと結論した。

もう一つの風説についても、内田は根拠がないとする。すなわち文禄4年には耕地面積が1反歩以下の狭い土地所有者と7反歩以上の広い土地所有者が複数存在するのに対し、明治23年の土地台帳にはこうした農家はほとんどなく、かえって中間層である2反歩から4反歩を所有する農家が中心的となっているという。現在でこそ耕地分配が平等化・平均化されているが、文禄4年当時はむしろ所有面積に格差があり、決して各戸の所有畑が伝統的に均分されていて共産社会・共産村を形成していたわけではないと結論した。

以上が初島の歴史地理学的研究の概要であるが、その他にも内田は耕地の分割の状況や耕地の等級、本家分家関係と耕地の分割などについて歴史的に分析し、さらに農業に次いで重要な産業であった水産業に言及している。まさに現在のための歴史地理学、および地人相関論を実践しようとした研究事例といえる。一方、当時の書評でも、文禄以前の状態に関する記述が少ない点を指摘されている<sup>91)</sup>が、これは史料を研究の基礎とする内田とすればやむを得ない選択であったと考えられる<sup>92)</sup>。

表1 『初島の経済地理に関する研究』の章構成

第一章	緒論 (1)
第二章	初島の戸口の増減 (3)
第三章	初島の耕地 (51)
第四章	初島の耕地並びに宅地の品等 (77)
第五章	文禄以後初島における耕地と戸口 (103)
第六章	文禄以後初島における耕地の分割 (127)
第七章	初島の耕地における等級の分布 (143)
第八章	初島の宅地 (159)
第九章	初島の戸別宅地反別の変化と分家問題 (172)
第十章	初島の耕地の分割と其の所有者の血統関係 (185)
第十一章	初島の耕地の区画と地割 (201)
第十二章	初島の水産業 (217)
第十三章	初島現時の経済生活の一般 (231)
附図 (巻尾)	

注) カッコ内の数字は各章の始まりのページを示す。  
章以下の項は省略した。

### (3) 武蔵野西窪村の研究

内田は昭和9年以降、研究対象を東京府下

の武蔵野新田集落にもとめ、精力的に取り組んでいく。真っ先に取り組んだのは、西窪村(現、武蔵野市西久保)に関する研究である<sup>93)</sup>。その後、昭和30年頃まで静岡県西俣村や丹那村、長野県伊那谷や千葉県九十九里の村々に関する研究が断続的に実施され、昭和34年に学位論文「江戸時代農村戸口の歴史地理学的研究」としてまとめられた<sup>94)</sup>。これが没後の昭和46年に『近世農村の人口地理的研究』として上梓されたが<sup>95)</sup>、先にあげた『初島の経済地理に関する研究』と並び、内田の代表的な歴史地理学研究となった<sup>96)</sup>。

本研究では通常の農村から被官農村、被官農山村・農漁村など54ヵ村<sup>97)</sup>が取り上げられたが、なかでも冒頭に述べた西窪村は、内田が「江戸時代農村の戸口研究の根本方針を決めた記念すべき」<sup>98)</sup>研究であった。実際、この著作を通覧すると西窪村に関する記述が全479頁中、129頁に及んでいる(表2)。そこで以下では、西窪村に関する研究を簡単に取り上げることとしたい。

西窪村は東京西郊の武蔵野台地にあり、東南東から西北西に走る道路に沿って、その両側に短冊型区画が櫛の歯状に設定された計画的な新田集落であった。近世を通じて純農村であり、初島と同様に畑作のみで生計を立て、幕末に木綿織絹織を見たに過ぎない。本研究は初島の研究と同様、耕地と人口に関する研究を主とするもので、主に近世から明治期までを取扱い、「農村更生上の何等かの方針方策を見出すに適切な根柢を把束し度い」<sup>99)</sup>との思いから出発していた。まさに「現在のための歴史地理学」を実践したものと受け止められる<sup>100)</sup>。

内田は現地に残る宗門人別改帳をはじめ、検地帳、人数書上帳、人数増減帳、村鏡などの各種近世文書、明治期の戸籍などを用いて当時の状況に迫っている。西窪村は寛文2年に戸数16戸からスタートした。寛文4年の最初の検地の頃には16戸のままであったもの

が正徳4(1714)年頃には34戸と2倍に大幅増加した。さらに享保11(1726)年には41戸に増加し、宝暦元(1751)年には50戸台となるが、文政年間(1818-1830)に至って40戸台に減少し、そのまま幕末まで至るのである。

開拓当初は耕地の「均田主義」が徹底され、各戸に割り当てられた耕地の反別は名主7町余歩、一般百姓5町歩内外で統一された。しかし当初の「均田主義」も上記のような戸数の増加傾向とともに破たんし、戸別面積が減少して土地細分の傾向が顕著になっていく。例えば元禄11(1698)年では3町歩、5町歩、6町歩がボリュームゾーンとなって当初の統一的な5町歩内外からは変動しており、さらに宝暦10年になると1町歩および1町歩未満が圧倒的に多くなり、全般的に小農化している状況が見て取れる。

明治に入ると農業技術が進歩したことで農作物の生産力が著しく増大し、人口支持力が高まり、開発当初100人未満であったと推定される住人が過去最高の294人に達するに至った。とはいえ近世に見られた耕地分配の不均等はますます度を強め、苦境に陥った人々が副業として工業や商業に従事する「農間工」「農間商」が出現して事態を打開しようとしたり、離村のやむなきに至ったりした者もいたようである。

以上、西窪村の歴史地理学研究について、主要な論点に絞って紹介した<sup>101)</sup>。この研究はすでに述べたように同時代の「農村更生」に貢献することを目的に着手されたものであり、また実現しなかったとはいえ当時の「現代」であった昭和初期までも考察範囲として想定していた点<sup>102)</sup>を考慮すると、初島の研究と同様、まさに「現在のための歴史地理学」の実践例であると考えられる<sup>103)</sup>。西窪村は近世に開発された新田集落であったことから近世以前に遡及する必要性は薄かったのも事実であるが、そもそもの研究の発端が「幸にも西窪の元の名主の後裔である井野

表2 『近世農村の人口地理的研究』の構成と初出論文

---

第1編	序説
第1章	本研究の動機と目的 (4)
第2章	本編で取扱った宗門人別改帳 (6)
第2編	関東地方(附 甲信)農村戸口概観
第1章	下須戸村の戸口 (18)
第2章	蓮沼村の戸口 (23)
第3章	下野田村の戸口 (30)
第4章	上小鹿野村の戸口 (39)
第5章	江曾原村の戸口 (49)
第6章	青柳村の戸口 (58)
第7章	中川崎村の戸口 (63)
第8章	以上7ヵ村の戸口についての共通点 (67)
第9章	その他関東地方(附 甲信)諸村の戸口 (69)
第3編	農村戸口詳論Ⅰ. 一普通の農村
第1章	西窪村の戸口 (80)
*	「武蔵野の計画的開拓の一例(上)(下)―武蔵野町西窪について」(昭和9年12月, 同10年12月)
*	「農村の戸口と土地との関係の一面―徳川時代における武蔵野西窪村の例」(昭和11年8月)
*	「農村の耕地と人口との関係の一面―維新後に於ける武蔵野西窪について(一・二・三)」(昭和11年7・8・10月)
*	「農村における人口問題―武蔵野西窪村宗門人別帳の研究(一)(二)(三)(四)」(昭和11年12月, 同12年1・2月, 同15年7月)
第2章	西俣村の戸口 (210)
*	「徳川時代農村における戸口増減の相関々係―遠州周知郡西俣村」(昭和16年7月)
*	「徳川時代農村における女子の結婚年齢と産児の一面―遠州周知郡西俣村」(昭和17年10月)
第3章	丹那村の戸口 (250)
*	「徳川時代農村中の特異なる人口現象―静岡県田方郡函南村丹那の場合について」(昭和16年10月)
第4章	真木山村の戸口 (269)
第5章	初島の戸口 (284)
*	「熱海初島における耕地と戸口と家系との関係の一面について」(昭和9年3月)
第4編	農村戸口詳論Ⅱ. 一被官農村並びに被官農村名残の村々
第1章	下瀬村の戸口 (302)
*	「伊那谷における農村の人的構成の歴史地理的研究―長野県下伊那郡下瀬における親方と門屋との関係」(昭和29年12月)
第2章	小町屋の戸口 (329)
第3章	柏木村の戸口 (355)
第4章	川路村の戸口 (379)
第5章	座光寺村の戸口 (390)
第6章	飯沼村の戸口 (398)
第5編	農村戸口詳論Ⅲ. 一被官の農山村・農漁村
第1章	御所平村の戸口 (408)
*	「農山村の戸口変遷とその意義―長野県南佐久郡川上村御所平の歴史地理的研究」(昭和30年12月)
第2章	片貝村の戸口 (431)
*	「九十九里浜における農村と水産業との関係(第二報)片貝村宗門帳の研究(上)」(昭和25年5月)
第3章	宿村の戸口 (449)
*	「九十九里浜における農業と水産業との関係(第一報)―宿村名寄帳の研究」(昭和24年3月)
第6編	結論
第1章	農村の人的構成並びに戸口構成 (470)
第2章	農村戸口の増減 (476)

---

注1) カッコ内の数字は各章の始まりのページを示す。

注2) アスタリスクを付した論文は初出論文を示す。

善太郎氏に寛文四年の検地帳<sup>104)</sup>が遺存していたことであり、近世史料の有無を一つの基準に研究対象地を選定していた事情がうかがえる。

さて、この章の最後に、その後の内田について簡単に触れることとしたい。昭和26年に東京教育大学を定年退官した内田は、同年に日本大学教授兼日本女子大学教授に就任した<sup>105)</sup>。またこの時期、内田は学会運営にも関わり、昭和26年から日本地理教育学会会長に、昭和31年には日本歴史地理学研究会顧問に就任している。これらはいずれも東京高等師範や東京文理科大学、東京教育大学の地理学関係者が主体的に関わった学会であった<sup>106)</sup>。また昭和29年から2年間、日本地理学会の会長も務め、学会運営に心を砕いている<sup>107)</sup>。昭和37年には最後の勤務先となった国士舘大学に教授として就任している。内田が亡くなったのは昭和44年9月、国士舘大教授の現職中で享年82歳であった。

## V. おわりに

本研究では、日本の近世歴史地理学の開祖である内田寛一について、その学問の形成過程と展開を論じた。内田は京都帝大助手にあった大正5年頃までは、主たる指導教官であった小川琢治の影響が濃厚に見られたが、大正14年に発表した歴史地理学論では、同じく指導教官であった石橋五郎の持論、すなわち歴史的考察に基づく地人相関論が強調されることとなった。すなわち大正後半に、内田の中では小川地理学から石橋地理学への移行が図られたこととなる。

これ以降、内田は「現在を説明するための歴史地理学」を標榜し、それを踏まえて近世歴史地理学を積極的に展開していった。内田の強みは農村に残る記録文書の収集・考証であり、これを存分に生かせる近世期を研究対象に選んだのは当然の帰結であった。この内田の学風は、主たる勤務校であった東京文理

科大学や東京教育大学の門下生に少なからず継承され、歴史地理学の「大塚学派」を形成することとなった。近世地方文書の活用は同時代の東京文理科大学国史学教室でも実践されていなかった可能性があり、まさに学内では内田の独壇場の感があったと考えられる<sup>108)</sup>。

この内田の学風がどのように門下に継承され、大塚学派を形成するにいたったかのプロセスの解明については、今後の課題としたい。(日本たばこ産業株式会社、早稲田大学(非))

## 〔付記〕

本研究を進めるにあたり、国士舘大学文学部地理学教室教授の岡島 建先生には同教室所蔵の『内田文庫』を閲覧する機会を提供していただきました。記して深く感謝いたします。

## 〔注〕

- 1) ①菊地利夫「内田寛一教授の歴史地理学上の位置と学風」歴史地理学紀要Ⅰ(本質と方法), 1959, 26-28頁, ②山崎謹哉編著『近世歴史地理学』大明堂, 1985, 3-4頁, ③小野寺 淳「近世歴史地理学の研究動向—方法論—」(高橋伸夫編『21世紀の人文地理学展望』古今書院, 2003), 397頁など。
- 2) ①岡田俊裕『地理学史論—人物と論争』古今書院, 2002, 47頁, ②岡田俊裕「内田寛一」(同『日本地理学人物事典【近代編1】』原書房, 2011), 394頁。
- 3) 前掲1) ①23-26頁。
- 4) 前掲1) ①16-19頁, 前掲2) ②393-399頁。
- 5) 内田寛一「江戸時代農村戸口の歴史地理学的研究」, 1959, 国立国会図書館蔵。
- 6) 菊地によれば、内田は大正2年から7年(25~35歳)に政治地理, 大正12年から昭和7年(36~45歳)に経済地理, 昭和8から17年(46~55歳)に歴史地理に集中的に取り組んだとある。前掲1) ①16-19頁。
- 7) 前掲1) ①12-29頁。
- 8) 例えば浅香幸雄編『日本の歴史地理』大明堂, 1978, 2-4頁, 前掲2) ①47頁。
- 9) 黒崎千晴「菊地利夫教授と歴史地理学」歴史人類9, 1980, 7頁。なお、「大塚学派」

- の大塚とは、内田の勤務した東京文理科大学や東京教育大学がもともと文京区大塚の地にあったことによる命名である。
- 10) 小牧実繁の歴史地理学に関する最近の専論として、川合一郎「小牧実繁の歴史地理学—その理論と実践的研究」歴史地理学59-4, 2017, 3-18頁がある。
  - 11) 内田の略歴は、①(無署名)「名誉会長内田寛一博士を悼む」新地理17-2, 1969, および②富田芳郎「紙碑 内田寛一先生を悼む」地理学評論42-12, 1969をベースとした。また、著作目録については、③(無署名)「内田寛一先生著作書目録」(内田寛一先生還暦祝賀会編『内田寛一先生還暦記念地理学論文集 下巻』帝国書院, 1952), 425-437頁, および④(無署名)「内田寛一先生著作書目録」新地理7-3・4(内田寛一先生古希記念号), 1959, 109-126頁を参照した。
  - 12) 朝倉隆太郎「内田寛一—和漢洋に通じた地理学者—」(唐澤富太郎編『図説 教育人物事典—日本教育史のなかの教育者群像—(中巻)』ぎょうせい, 1984), 761頁。
  - 13) 内田寛一『山のこなた』中興館, 1928, 2-12頁。
  - 14) 東京高等師範学校『東京高等師範学校一覧 自明治三十九年四月 至明治四十年三月』, 1906, 222-223頁。なお, 明治43年3月卒業時の所属は本科地理歴史部であった。東京高等師範学校『東京高等師範学校一覧 自明治四十三年四月 至明治四十四年三月』, 1910, 314-316頁。
  - 15) 日本地理教育学会編集委員会「私はどういう動機から地理学を専攻するようになったか」新地理11-2, 1963, 79頁。
  - 16) 田中啓爾「初代会長山崎先生の追憶」地理学評論28, 1955, 404頁。
  - 17) 内田寛一「恩師 小川琢治先生を偲ぶ」中等教育資料14-15, 1965, 16頁。内田は「中でも最もご恩を蒙ったのは高師では山崎先生, 大学では小川先生であった」と述べている。
  - 18) 京都帝国大学『京都帝国大学一覧 従明治四十三年 至明治四十四年』, 1911, 22頁(学生及生徒姓名)。
  - 19) 京都大学文学部地理学教室編『京都大学文学部地理学教室百年史』ナカニシヤ出版, 2008, 8頁, 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 部局史二』東京大学, 1987, 603頁。東京帝国大学では理科大学地質学科に地理学講座が設置された。
  - 20) 前掲17) 16頁。
  - 21) 前掲2) ②394頁。
  - 22) 前掲1) ①22頁。
  - 23) 内田銀蔵は地理学にも造詣のある史学者であった。内田銀蔵「史学地理学と他の諸学科との連絡関係に就きて」(同『歴史の理論』河出書房, 1943), 161-182頁。内田銀蔵から具体的にどのような影響を受けたのかは今後の検討課題である。
  - 24) (無署名)「京都文科大学本年度卒業論文」芸文4-7, 1913, 80頁, 京都帝国大学『京都帝国大学一覧 自大正三年 至大正四年』, 1914, 368頁。
  - 25) 国士舘大学文学部地理学教室では内田の蔵書の一部を「内田寛一文庫」として保管しているが, 残念ながらその中に卒業論文は残存していなかった。同文庫については同教室ホームページ (<http://bungakubu.kokushikan.ac.jp/Chiri/Bunko/Ubunko00Mar.htm>), および国士舘大学文学部・同創設三十周年記念行事実行委員会編『国士舘大学文学部創設三十年史』国士舘大学文学部, 1996, 150頁を参照のこと。ちなみに同文庫には主に戦前・戦後の地理教科書や旧満州関連書籍, 地理学の専門書が所蔵されており, 内田自身の手になる宗門改帳, 検地帳などの調査簿(史料に記載の人口動態等のデータを抽出・整理)も20点以上残存している。なお, 内田の蔵書は, 国士舘大学以外にも名古屋大学附属図書館(「内田文庫」)や国立歴史民俗博物館(「内田寛一古地図コレクション」)に所蔵されているが, 前者の所蔵品は洋書, 後者は古地図中心である。
  - 26) このコメントについて, 菊地自身がこの卒論を実見したか, または内田からこの卒論についてヒアリングした可能性があるが, 菊地没後の今となっては確かめようがない

- い。前掲1) ①22頁。
- 27) 岡田俊裕「小川琢治」(同『日本地理学人物事典【近代編1】』原書房, 2011), 187頁。
- 28) 前掲17) 19頁。
- 29) 前掲1) ①22頁。
- 30) 内田はのちに「秦嶺山系は(略) 其の以北の平地及び山地と以南の平地及び山地とでは, 自然の地形地質や, 地帯構造や, 気候の状態等の相違があるばかりでなく, その地方に住する人々の生活状態もまた相違の点が現はれてゐる。(略) 秦嶺の山系は支那南北の境界として古来地理上深い意義を保持して来たといふことが出来る」と述べているが, これは卒論のエッセンスではないかと考えられる。内田寛一「中南支の意義」(石田龍次郎他編『世界地理 第4巻 支那II (中南支)』河出書房, 1939), 7頁。
- 31) (無署名)「大学院入学」芸文4-11, 1913, 461頁。
- 32) 京都帝国大学『京都帝国大学一覧 自大正四年 至大正五年』, 1916, 88頁。
- 33) 辻村太郎「東西両京の地理学者 山崎直方と小川琢治」地理15-12, 1970, 7-14頁, 内田寛一「田中君と私」田中秀作古希記念祝賀会報告, 1957, 22頁。この際, 内田は小川より氷河地形の研究をするよう指示を受けていたという。
- 34) 内田寛一「我が占領南洋諸島視察概報」(文部省専門学務局『南洋新占領地視察報告』, 1916), 81-96頁。
- 35) 山野正彦「探検と地政学—大戦期における今西錦司と小牧実繁の志向—」人文研究51-9, 1999, 1114-1115頁。また, 内田は大正元年8月に行われた小川の笠原諸島学術旅行に同行しており, 南洋諸島への関心を共有したと思われる。また大戦後, 内田は政治地理学への関心を高めていったが, これが小川の影響かどうかは不明である。内田寛一『大戦後の世界地理概観』右文館, 1920など。
- 36) (無署名)「史学研究会 例会」史林1-1, 1916, 174-175頁。
- 37) 石橋五郎「教室回顧三十年」地理学談話会会報3, 1936, 4頁。留学期間は明治43年から大正元年までであった。
- 38) 内田によれば, 内田の文科大学在学中, 「石橋先生は在外中で, 先生の講義は卒業後に始まつた」とある。内田寛一「そのころの思い出」(京都大学文学部『京都大学文学部五十年史』, 1956), 489-490頁。
- 39) 大正5年の『文部省職員録』の「図書課」欄には, 「図書官 七等十級」として内田の名前が見える。文部大臣官房秘書課『大正五年十一月一日調 文部省職員録』, 1916, 5頁。この時代, 内田は地理教育や郷土教育への認識・思考を深めていったが, そのあたりの事情は以下文献に詳しい。内田寛一「私の図書監修官時代」月刊社会科教室47, 1964, 2-5頁。また, 郷土教育への関心は, のちに代表作の一つである内田寛一『郷土地理研究』雄山閣, 1933に結実した。
- 40) 浦和高等学校『浦和高等学校一覧 第四年度 自大正十四年 至大正十五年』, 1925, 170頁, 東京高等師範学校『東京高等師範学校 第一臨時教員養成所一覧 自大正十三年四月 至大正十四年三月』, 1925, 265頁。東京高等師範については大正7年12月から昭和26年3月まで断続的に講師を勤めていた。
- 41) 内田寛一「地理学研究上に於ける史的観察の分野(上)」地理教育2-2, 1925, 105-110頁, 同「地理学研究上に於ける史的観察の分野(中)」地理教育2-3, 1925, 225-228頁, 同「地理学研究上に於ける史的観察の分野(下)」地理教育2-6, 524-528頁。
- 42) 内田寛一「歴史地理の重要性」(人文地理学会編『歴史地理学の諸問題』柳原書店, 1952, 3-8頁。
- 43) 前掲1) ①15頁。
- 44) ほかに昭和34年発行の『歴史地理講座』のなかの「歴史地理学序説」があるが, この内容も従来と同じ立場である。内田寛一「I 歴史地理学序説」(森 鹿三・織田武雄編『歴史地理講座 第1巻 総論・ヨーロッパ』朝倉書店, 1959) 3-12頁。
- 45) 前掲42) 3頁。
- 46) 前掲41) 524頁, 前掲42) 7頁。
- 47) 前掲41) 226頁。

- 48) 前掲41) 227頁。
- 49) 菊地利夫『新訂 歴史地理学方法論』大明堂, 1987, 273-276頁。
- 50) 前掲1) ①25頁。
- 51) 前掲42) 8頁。
- 52) 水津一朗「小川琢治先生とその後の日本における歴史地理学(山崎直方・小川琢治両先生生誕百年記念特集号)」地理学評論44-8, 1971, 565頁, 572頁下段の注30。
- 53) 岡田俊裕『日本地理学史論—個人史的研究』古今書院, 2000, 118-119頁。
- 54) 前掲2) ①26頁, 岡田俊裕「石橋五郎」(同『日本地理学人物事典【近代編1】』原書房, 2011), 272頁。
- 55) 川合一郎「石橋五郎の歴史地理学と人文地理学」歴史地理学52-4, 2010, 8-11頁。
- 56) 石橋五郎「我が地理学観—発刊の辞にかへて—」地理論叢1, 1932, 20-21頁。
- 57) 内田寛一「地人相関の理法的研究に就いて(七)」地理教育5-6, 1927, 440頁。
- 58) 藤岡謙二郎『回想と自己批判(続・多兎を追う者)』大明堂, 1978, 8-9頁。
- 59) 藤岡謙二郎「歴史地理学研究史」(同編『人文地理学研究法』朝倉書店, 1957), 72頁。
- 60) 岡田も石橋の学風を継承する門弟として内田の名をあげている。前掲2) ①26頁。
- 61) この時期の経済地理的な論文は、のちに内田寛一『経済地域に関する諸問題の研究』中興館, 1934にまとめられた。
- 62) 島袋善弘『現代資本主義形成期の農村社会運動』西田書店, 1996, 17-24頁。
- 63) 内田寛一『近世農村の人口地理的研究』帝国書院, 1971, 4頁。
- 64) 近世史家の木村 礎は、近世村落は「日本の近代を根底において規定した」と述べ、近世村落研究の重要性を指摘している。その意味で、近代を明らかにするために近世に着目するという内田の着眼点は正鵠を射ていたといえよう。木村 礎『近世の村』ニュートンプレス, 1980, 3頁。
- 65) 内田寛一「徳川時代における全国的人口」地理3-1, 1940, 17頁。
- 66) 内田寛一「耕地の区画と戸口との関係」会報4(日大地歴学会), 1934, 26-33頁。なおこの論考は、前年の昭和8年11月の臨地講演会の要旨としてまとめられたものである。
- 67) 前掲66) 33頁。
- 68) 農村に関する歴史地理学的研究の嚆矢は、昭和5年の「九十九里浜地方(九十九里平野)における人文の発達と海岸線の変化」である。内田寛一「九十九里浜地方(九十九里平野)における人文の発達と海岸線の変化」日本学術協会報告6, 1930, 150-160頁。ただしこの論文は、九十九里浜の海岸線の自然地理的な変遷を先史から現代にいたる集落の発達過程から推定したものであり、近世農村に焦点を絞った研究ではなかった。
- 69) 前掲66) 26-27頁。内田は冒頭で条里制の概要に簡単に触れるにとどまり、それ以上深掘することはなかった。
- 70) 内田寛一「農村における人口問題—武蔵野西窪村宗門人別帳の研究(一)」地理と経済2-6, 1936, 611頁。
- 71) 山崎謹哉「地理学における我が国近世村落の研究—その展開と問題点—」人文地理31-2, 1979, 51-52頁。なお、この「文献歴史地理学」は、「考古歴史地理学」「民俗歴史地理学」と並ぶ歴史地理学の分類上の呼称で、歴史地理学者の藤岡謙二郎の命名になるものである。
- 72) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第七巻』吉川弘文館, 1986, 311-312頁。
- 73) 前掲1) ①28頁。なお、前掲66)によれば昭和8年11月の講演時点で「過去十数年間に蒐集」と述べており、おおよそ大正後半から着手したことが窺える。
- 74) 内田は古本屋業界でも文献収集家として著名であったといわれる。(無署名)「地理学者を語る」地理学4-9, 1936, 1794頁。
- 75) 前掲63) 9頁。
- 76) 内田寛一『初島の経済地理に関する研究』中興館, 1934, 4頁。これによると渡島4回目ようやく元名主の所蔵する古文書の一部を閲覧できたとある。
- 77) 剣持常昌『愛情ひとすじ四十年』煥乎堂, 1968, 9頁。
- 78) 前掲1) ①28頁。

- 79) 本庄栄治郎『近世農村問題史論』改造社、1925、序1頁。
- 80) 浅香幸雄「(紙碑) 現代日本歴史地理学の開拓者 内田寛一先生」会員通信51(歴史地理学会)、1969、8頁。
- 81) 東京文科大学『東京文科大学一覧 自昭和九年四月 至昭和十年三月』、1934、54頁。内田は、助教授就任以前の昭和5年からすでに同大学の講師を勤めていた。この時の同僚は、地誌学で有名な田中啓爾助教授であった。なお、昭和10年4月までは東京文科大学に加え、東京高等師範教授を兼務していた。
- 82) 東京文科大学『東京文科大学閉学記念誌』1955、173-175頁。
- 83) 前掲81) 175頁、芳賀 登編『肥後和男歴史学を考える』教育出版センター、1993、10頁。
- 84) 講師の辻善之助は近世史を対象としていたが、その専門は仏教史であった。
- 85) 黒崎は内田の徹底した史料収集について、大塚(東京文科大学・東京教育大学)のとある日本史家による「地理屋の歩いたあとには、チリ一つも残されていないから…」との言を紹介している。前掲9) 7頁。
- 86) 前掲76)。本書は地理学界のみならず農業経済学界においても愛読されたという。前掲1) ①16頁。
- 87) 角川日本地名大辞典編纂委員会編『角川日本地名大辞典13 東京都』角川書店、1978、766-767頁。
- 88) 文禄4(1595)年の検地帳については、昭和2年に日本大学学生小川静三が初島を調査した際に筆写したものを借覧したとある。前掲76) 序4頁。
- 89) 前掲76) 2頁。
- 90) 前掲76) 12頁。なお、この引用はあくまで戸口の増減に関わる章での言明であるが、戸口に限らず全体に通底する問題意識であると考えられる。
- 91) 無署名「(紹介) 初島の経済地理に関する研究 内田寛一著」史林19-3、1934、570頁。
- 92) 内田は、初島における条里の実施有無について「初島において、班田収授が行はれ、
- 條田の制が実施されたかといふに、それを肯定する為の何等頼るべき材料がない」と述べている。前掲76) 215頁。
- 93) 内田寛一「武蔵野の計画的開拓の一例(上) —武蔵野町西窪について」大塚地理学会論文集4、1934、81-96頁。
- 94) 前掲5)。この論文に対して昭和34年8月31日、日本大学から文学博士の学位を授与されている。能勢岩吉編『日本博士録 第5巻(昭和34年集)』日本図書センター、1985(初版1960)、423頁。
- 95) 前掲63)。なお、原論文にある「附図」は割愛されている。
- 96) 浅井によれば、内田のこの著作は「日本では前人未到の領域であるばかりでなく、外国にもほとんど先例のないものである」という。浅井得一「書評 内田寛一著 近世農村の人口地理的研究」人文学会紀要4、1972、131頁。
- 97) 前掲63) 10頁所収の「第1図 研究対象農村一覧図」による。なお、「被官農村、被官農山村・農漁村」とは、有力農民に隷属する身分の農民がいた農山漁村を指す。
- 98) 前掲96) 133頁。
- 99) 内田寛一「農村の耕地と人口との関係の一面(一) —維新後における武蔵野西窪村について」地理と経済2、1936、62頁。この引用の箇所は『近世農村の人口地理的研究』に記載されていない。
- 100) 本研究ではあまり地人相関論が前面には出ていないが、その基底には論考「歴史地理の重要性」にあるように「人が自然をいかに、いかに利用開発しているか」という視点もあると思われる。前掲42) 8頁。
- 101) 本文では触れられなかったが、この研究の本来の目的は「江戸時代の農村戸口実態の共通点を究明する」ことにあった。第2編第8章では「以上7ヵ村の戸口についての共通性」を立項するなど、近世農村人口に関わる共通点を見出すことに重点を置いている。近世の西窪村についていえば、耕地面積が一定で戸数が減少する場合は1戸あたりの耕地面積が増加し、その結果、各戸の人口支持力が増えて村全体の人口が増加



する傾向，すなわち「1村戸数の減少と総人口の増加との逆行関係の事実」が見られるとした。これは「武蔵国を主として関東地方数十箇村」に「殆んど例外なしに認められる」共通性であると指摘している。

102)前掲99) 62頁。

103)藤岡はこの「現在のための歴史地理学」については別の見方を示しており，具体的には「内田の個々の研究をみると，例えば『徳川時代農村における戸口増減の相関々係』（昭和一六年）のごときは小牧派のクロスセクションの研究」，すなわち近世という「時の断面」の研究であったと指摘している。前掲58) 15頁。

104)前掲63) 86頁。

105)前掲11) ①所収の略歴によれば，日本大学

は昭和36年3月まで，日本女子大学は昭和40年3月まで教授を務めた。この他，横浜高等商業学校（現，横浜国立大学）や東京工業大学，駒澤大学，早稲田大学，名古屋大学，宇都宮大学でも講師として教鞭をとっている。

106)日本地理教育学会については，内田寛一「地理学界の思い出」地理学評論27-7・8，1954，324頁を参照。

107)前掲106) 324頁。

108)菊地によれば「史学界で近世文書を本格的にとりあげたのは終戦後からと言ってもよいだろう」と述べている。前掲1) ①27-28頁。内田の研究が，東京文科大学内のみならず史学界全体に先んずる動きだったかどうかは今後の検討課題としたい。